

第1章 講演：天草南部（牛深・河浦）地域史入門

鶴田 文史

【配布レジュメ】

○はじめに

一、天草地域のなかでの南部の位置（特色）

- 1、古墳・城郭の存続僅少地域（古代・中世）
- 2、非天草の乱地域（近世）
- 3、天草明治三大”騒動”地域（近代前期）

二、領主天草氏とコレジョ文化（河浦）

- 1、天草氏（14C.～16C.）と河内浦城と天草の町
- 2、天草コレジョよ天草版本
- 3、南蛮文化（ラテン民族+カトリック）

三、天草の乱とその後の行政と社会

- 1、天草の乱と河内浦郡代所
- 2、組村制度（一町田組・久玉組）
- 3、遠見番・山方番・湊番所制度（牛深・魚貫・崎津）
- 4、六大銀主の一（牛深万屋）と百姓一揆（発生僅少）

四、天草南部の明治期運動（河浦・牛深）

- 1、今富の血税運動（明治6）
- 2、深海の徴用運動（明治10）
- 3、牛深の民権運動（明治22）
- 4、魚貫の炭坑運動（明治42）

五、天草南部の宗教活動

- 1、浄土真宗と浄土宗（非禅宗）
- 2、宮社（十五社・八幡宮・天満宮・諏訪宮・ほか）
- 3、潜伏かくれから復活キリシタン（富津）

六、牛深の鰹漁業と問屋制度

- 1、天草の定浦制度と牛深・崎津
- 2、鰹漁業文化文政期全国有数

七、苓中・苓南炭田

- 1、一町田の炭鉱（今村・旭）
- 2、今富の炭鉱（今富・益田）

3、魚貫の炭鉱（新山・魚貫・権現山・南天・久貫）

4、牛深の炭鉱（牛深・砂月）

八、牛深の民謡文化

1、牛深のハイヤ節の全国流行と阿波徳島の藍問屋との交流

2、深海下平の初つき唄と疱瘡との関与

○ おわりに——小結

1、漁業・炭鉱地域（近代・現代前期）

2、国選定文化的景観地（近年）

3、今後の展望は？

こんにちは。初めての方もいらっしゃると思いますが、私は天草で生まれ、天草で研究をしております鶴田文史です。研究歴55年で、出版歴45年で出版物は40冊になります。お手元にもその目録を紹介しています。天草の歴史、文化について研究を続けております。

今年のこの地域交流講演会では、「天草の地域研究の実践」ということで、私に1時間半の時間をいただいたのですが、少し時間が延びてしまい、ご迷惑をおかけしました。今日は30分間ということですので、時間厳守でお話しをしたいと思います。

私の研究は幅が広いように見受けられますが、テーマが多くて、いまだ底が深くてなかなか到達ができないところです。しかし、死ぬまでもう少し仕事をしていきたいと考えております。私の理想としては、あと10冊出版するまではということなのです。命と時間がどうなるかわかりませんが…。

一、テーマと地域区分

今日はそういうなかで、テーマとしてお手元にあるように「天草南部の地域史入門」と題して、30分という短時間ですので、深入りせずに入り口になるかと思いますが、お付き合い下さい。なぜ天草の南部に限って今日のテーマを設けたかと言いますと、実は昨年関西大学の調査団がいらっしゃって、北部の荅北町を拠点にされました。今年は、南部の牛深を中心に調査をされると聞きましたので、それでは南部に限ってお話することにします。

天草の南部というと、南端は牛深でございます。しかし、区域分けはなかなか難しい。ただ、私なりに天草を5つに分けて、本渡はセンター地域ですね。そして本渡から南は南部とします。北は五和・荅北として北部です。また、天草の代名詞として「荅州」という表現がありますが、荅北という地名は現在も活かされております。「荅西」、つまり西部は今で言う天草町となります。「荅東」は、瀬戸を渡って東の地域である天草上島、そして大矢野島までを含むという具合に、私の場合は区域分けをしています。ちょうど近世、江戸時代から明治時代に入る直前までになりますが、この頃には天草を1町10組としています。その1町は富岡町でございますが、あと10組は、荅北では御領組・井手組・志岐組、荅西は大江組、東部は栖本組・砥岐組・大矢野組という3つの組があり、南部は新和町にあたります本渡組の南半分、河浦町にあたる一町田組で、旧牛深市にあたるところが久玉組になります。現在は牛深が中心に

なっていますが、近世の行政の中心は久玉でした。しかし、牛深の人口が多くて経済的に栄えていくので、それが近代に入りますと「マチ化」して、それが市になっていく。今日、私が南部というのは、旧河浦町、旧牛深市となります。深入りはできませんので、概略になりますが、お手元の資料にある一から八までの構成で進めたいのですが、全部しゃべると時間が足りませんので、ポイントだけを述べることにします。

南部の特徴を考えてみますと、古代の前半、つまり4世紀から7世紀後半は古墳時代と称します。この古墳というのが苓南は少ないですね。どちらかという、苓東の方が、大矢野・天草上島の方が多いですね。これは何を意味するかと言うと、天草の古代の進展状況というのは熊本に近い方が発達して進んでいたと考えられます。苓南の方は古墳が少ないということは遅れていた、とするのは語弊がありますが、古墳の存在状況からすれば、天草のなかでは東部から発達をしていったと考えられます。

二、天草氏とコレジヨ文化

中世というのは、「お城の時代」と呼んでいいと思います。この時代には「天草五人衆」という言葉もここで出てきます。そこで苓南の方は、天草氏の区域になります。天草五人衆のなかで一番大きな勢力を持っていたのが天草氏です。天草氏の拠点、鎌倉時代は本渡でした。ところが、室町時代になりますと、現在の河浦町を中心としていきます。したがって、鎌倉時代には天草のなかで本渡が中心でしたが、室町時代になると河浦が中心といえます。当時は、「河浦（カウウラ）」と呼ばずに「河内浦（カワチノウラ）」と言っていました。その後近代に入って河浦とするように変化しました。それから北部では志岐氏が、苓東では3つに分かれて一番東側が大矢野氏、そして上島の北側が上津浦氏、南側は栖本氏が存在しました。これが当時の天草の土豪ですね。これを天草五人衆と呼んでいるのです。その天草五人衆のなかで苓南地区は天草氏の区域ですね。そして、天草氏が中心で天草の町と呼ばれたのが現代の河浦町です。当時の天草では南部の方が栄えていたと言えます。したがって、天草全体でお城の数は50ほど数えることができるのです。南部の方では南蛮貿易によって、天草への鉄砲伝来ということを含めて南蛮文化が伝わってきます。そのなかで、キリスト教思想に関わる文化が天草に影響を与えていきます。その中心になるのが、天草氏、そして河浦を中心とする南部地区であったということは確かですね。この地域の象徴となるのが、コレジヨです。いわゆるキリスト教による大神学校でございすけれども、中身はいまのクラスで言いますと大学になります。その大学は、日本全体からみても比叡山、高野山、そして京都五山、鎌倉五山という仏教大学はあるけれども、西洋のキリスト教による神学校は宗教性が絡んでいますが、当時のヨーロッパの合理主義による、そして実証主義、しかも科学的な大学がありました。そういう意味では日本で一番科学的に学問が進んだ大学が天草コレジヨであったのです。コレジヨの歴史をみると所在地は転々としますが、そのなかでも天草に存在した期間が長崎の次に長いし、最も学校として熟していたのです。その根拠、バロメーターになるのを言いますと、テキストの出版が挙げられます。例えば、『平家物語』や『イソップ物語』、そして『羅葡日対訳辞典』などの書籍出版が天草コレジヨで行われた。その点で天草コレジヨの優れた大学校、教育制度が日本で唯一と言って良いと思います。つまり、日本で最も優れた、そして進んだ大学が天草に天正19年（1591）から7年間

存在したという歴史があるのです。これは、天草の大きな誇りであるし、天草文化のなかのコレジヨ文化は日本の最先端であったこととなります。コレジヨ設置に関して、本渡説を唱える人もおりますが、それは史実の根拠がありません。もちろん物的な根拠はまだ河浦の方でも証明するに至ってはおりませんが、文献史学からいきますと、河内之浦すなわち河浦であることは間違いのないのです。このように河浦はすばらしい中世の日本文化に関わるコレジヨ文化が存在したわけで、それをリードしたのが天草氏であったわけです。こういう特色が南部にはあります。

三、西海の乱と百姓一揆の地域性

全国的に近世は織田信長の時代から、安土から始まるわけです。天草の場合は、天正17年の天草合戦が中世と近世の境目で、そこから近世へと変わっていきます。さらにその47年後になりますが、「天草の乱」が起きます。いわゆる「天草島原の乱」、私はこれを単なる天草・島原の出来事ではなくて、九州の大反乱であると考えています。九州、西海は奈良時代から日本の道州制が始まったときに「西海道」と位置づけられています。よって、天草の乱は西海における大きな反乱であったということから、私は「西海の乱」という呼び方を提唱しております。その乱から天草の歴史が大きく変わっていきます。その乱後、鈴木代官が着任してから天草の天領制度が仕組まれていきます。そこで天草の新しい体制が組織化されます。新しいシステムが作られますが、そのなかで特色があるのは、天草の場合、百姓一揆が全国的にみても多いのです。多いということは、またひとつのバロメーターになるのです。それはどういうバロメーターかと言いますと、天草が貧しくて百姓が一揆を起こしたと、単純化するとそういう表現される場合があります。しかし、これは細川藩の百姓一揆がゼロに等しい。それが善政であったのか、肥後の農民たちは貧しくなかったのか。農民の貧しさは全国的にあまり変わらない。ところが天草あたりでは一揆が多かった。その多かったというのは、貧しいから多いというのはひとつの表現でありますけれども、必ずしもそうではない。天領と私領（大名領）の場合では、武士（武力）の対応が違ってきます。一揆が起きますと、武士は弾圧をいたしますが、私領は組織的な武力を持っているのです。天領の場合は、武士はゼロに等しいのです。天草では富岡に事務方が5、6人いるだけで、武士がいません。つまり、武装機関がない。しかし、天草でも一揆が発生すると、富岡の役人が天草に一番近い島原藩にお願いをするわけです。天草に兵をよこしてください、そして弾圧をしてください、という形で弾圧をされるわけですね。ただ、天草の場合は一揆の発生初期に弾圧機関がないため、一揆が起りやすい。全国的に一揆が起こるのは天領に多いですね。それは、弾圧機関が弱いために一揆が多く発生するということです。一揆の多い、少ない、といったことを単なる貧しいからという理由で整理してはいけません。天草では発生初期に一揆が展開されますが、その後に島原藩がやってきて弾圧を受けるという歴史があります。天草全体の百姓一揆において、苓南は少ない。

天草の乱の場合を説明してみましよう。天草の乱のときに苓南地区はゼロではないのですが、影響は極めて少ない。天草の乱は、天草全体が立ち上がったというひとつの表現がありますけれども、厳密に言いますと有明海に面する天草の北部が乱に参加をしている。基本的に南部は参加していません。例外として個々に参加することがあったにしても、組織としては関係していません。北部と南部ではそうい

う違いがあります。だから、苓南地域は天草の乱そのものに参加をしていない。天領になってからも百姓一揆が少ない。この点では天草のほかの地域との違いが読み取れます。なぜ、少なかったのかという答えを出すのはなかなか難しいわけです。

四、明治四大運動の発地域

近代に入りますと、明治時代が到来すると全国的に新しい急激な変化がみられます。天草の場合もそうです。明治に入ってからも一揆が起こります。支配者側はそれを“騒動”と呼び、明治騒動と言います。天草では4ヶ所挙げることができます。明治6年（1873）に崎津において血税騒動が起こります。これは天草だけではなくて、全国的に徴兵令が明治6年に出されますので、それによって徴兵される。徴兵によって20歳の若者が生産関係から切り離されることとなります。一般的に貧しいなかで労働力である若者が取られるということは、生活がさらに急激に低下する。当然、徴兵には反対だということで立ち上がる。これは全国的にも多いですね。さきほど、肥後熊本では百姓一揆はなかったという話をしましたけれども、それは私の理解では武装機関が厳しかったから一揆が起こらなかったと申しました。血税騒動でも熊本方面では起こらなくて、天草では東部の高戸でもありましたが、崎津では徹底的に立ち上がるわけです。続いて、明治10年（1877）の西南戦争のときには、官軍が天草の農民、漁民を徴用します。戦争の兵隊にではなく、食料や兵器・弾薬を運ぶ仕事をさせようとしています。戦争になれば、死傷者が出ますから、その人々を運ぶということもあり、そういう労働をさせるために徴用が行われた。天草の漁民、とくに深海・宮野河内など不知火海沿岸の村々から徴用ということになったので、それに対して反対運動が起こります。運動という言葉はここで初めて使いましたが、支配者側からみれば騒動ですね。天草の島民からすると、それは生活改善の運動です。自分たちの身に危険が迫った場合、それに対して反対をする。だから、これは抑圧された民衆が自分たちの生活を守るためのたたかい、運動であったわけです。これが崎津、深海、宮野河内といったところで起こりました。牛深では、いまから3代前の市長であった宇良田さんの曾祖父にあたる人物が宇良田玄彰です。玄彰は、民衆の権利を主張する自由民権運動を起こしました。天草の自由民権運動のリーダーとして活躍したのですが、私はその人の足跡を追って研究を進めました。今日は苓南地区をテーマにしていますが、私が昭和40年（1965）から平成6年（1994）ごろまでにまとめた研究をもとにお話をしています。それらをまとめて『天草潮深のふるさと』という本を出版しています。「牛深」は動物の「牛」の文字を使っていますが、もとは海の「潮」（潮が深い）であり、それが牛深へと名前が変わってきたようです。苓南地域における民衆の運動というものを3つ紹介しました。さらにもう1つは、魚貫です。ここは炭鉱の盛んだった所ですが、明治43年（1910）に炭鉱で運動が起こります。明治になりますと、資本と労働という関係のなかから、労働者が資本家に搾取されるという傾向がみられます。天草では炭鉱においてそれがもろに行われていくわけです。搾取に居たたまれない人々が立ち上がった運動です。近代の民衆運動にはいくつかの形態がありますが、天草でも血税反対運動、徴用反対運動、自由民権運動、そして炭鉱改善運動というのが起こりました。これは、天草全体のなかで苓南地区に限られるのですね。このような特色がみられます。

五、鰹漁業と炭鉱業の産業地域

江戸時代天草の漁業で、牛深と御所浦は一、二を争います。牛深の漁業の特色は鰹漁ですね。この鰹漁は全国の樺に入ります。文政5年（1822）の鰹漁に関する記録（番付表）では、トップクラスの行司に次いで、世話人として「天草」という表記で登場しますが、中身を考えて牛深となるわけです。牛深の鰹漁はそれでは全国的なものだったといえます。享保年間に始まり、文政年間の記録に登場し、そして明治・大正になるまでその地位を維持します。江戸時代に牛深の漁業の中心にいた網元が中島屋（緒方家）であって、明治になると川端屋（深川家）に交代します。牛深の漁業は発達をしていたわけですが、残念ながら現在は海流の関係などもあり、大正から昭和は鰹漁業にとってかわって、イワシ漁業が盛況となりました。苓南、牛深において漁業は落としてはならない重要なテーマです。

今回詳しく触れられなかったのですが、天草の炭鉱は考えてみるべき課題です。これは知る人ぞ知るで、全く話題に上らない。もとあった所へ行ってみても何の跡形もない。ある意味で寂しいですが、そういう状態です。苓北では志岐、坂瀬川、都呂々です。苓中・苓南は、一町田の旭炭鉱、今富炭鉱、魚貫炭鉱、牛深炭鉱ですね。南北でみた場合、北部が4分、南部が6分となりますが、そのなかでの拠点は魚貫です。さきほど、明治43年の魚貫での運動が起こったお話をしましたが、昭和28年（1953）と33年（1958）には数ヶ月の大ストライキを実行しました。天草の炭鉱は戦後まで続きますが、エネルギー転換によって昭和39年（1964）にはほぼ閉鎖されることとなります。ただし、魚貫は昭和48年（1973）まで、志岐は昭和50年（1975）まで残ります。魚貫を中心とした苓南の炭鉱については、いま全く話題になりませんが、私の天草地域史の最後の仕事としては、天草の炭鉱の資料集だけは出版したいと思っております。

六、牛深ハイヤ節の全国的影響

最後に、牛深で成立して、全国に影響を与えた民謡について触れておきたいと思います。それは牛深ハイヤ節です。牛深は東シナ海・天草灘に面した寄港地です。牛深の鰹節をめざして入る舟と風波を避けて寄る船とが多く、船乗りたちの休息地で、酒と女と唄が盛んでありました。そのため牛深ハイヤ節が船乗りたちによって、港々へと唄い継がれました。それは牛深より、下りの鹿児島へ、上りの大坂へ。大坂から酒田（現・山形県酒田市）への西廻り航路と、酒田から江戸までの東廻り航路に広まりました。そして、それぞれの土地の民謡と合曲して、その土地の民謡として存続しています。それが全国各地のハイヤ節・ハンヤ節・アイヤ節・おけさ等々であります。以上のようなことから、牛深ハイヤ節が全国的に影響を与えた文化の歴史であることについて、これは再確認・再評価の時期にきているのです。

以上お話をしてきましたように、苓南地域の特色をみてきました。それをさらに深めていきたいところですが、時間切れとなりました。そういうことで苓南地域では漁業や炭鉱、そして文化の課題を取り上げながら、歴史を見直していく必要があります。それではこれで終わりとさせていただきます。どうもありがとうございました。